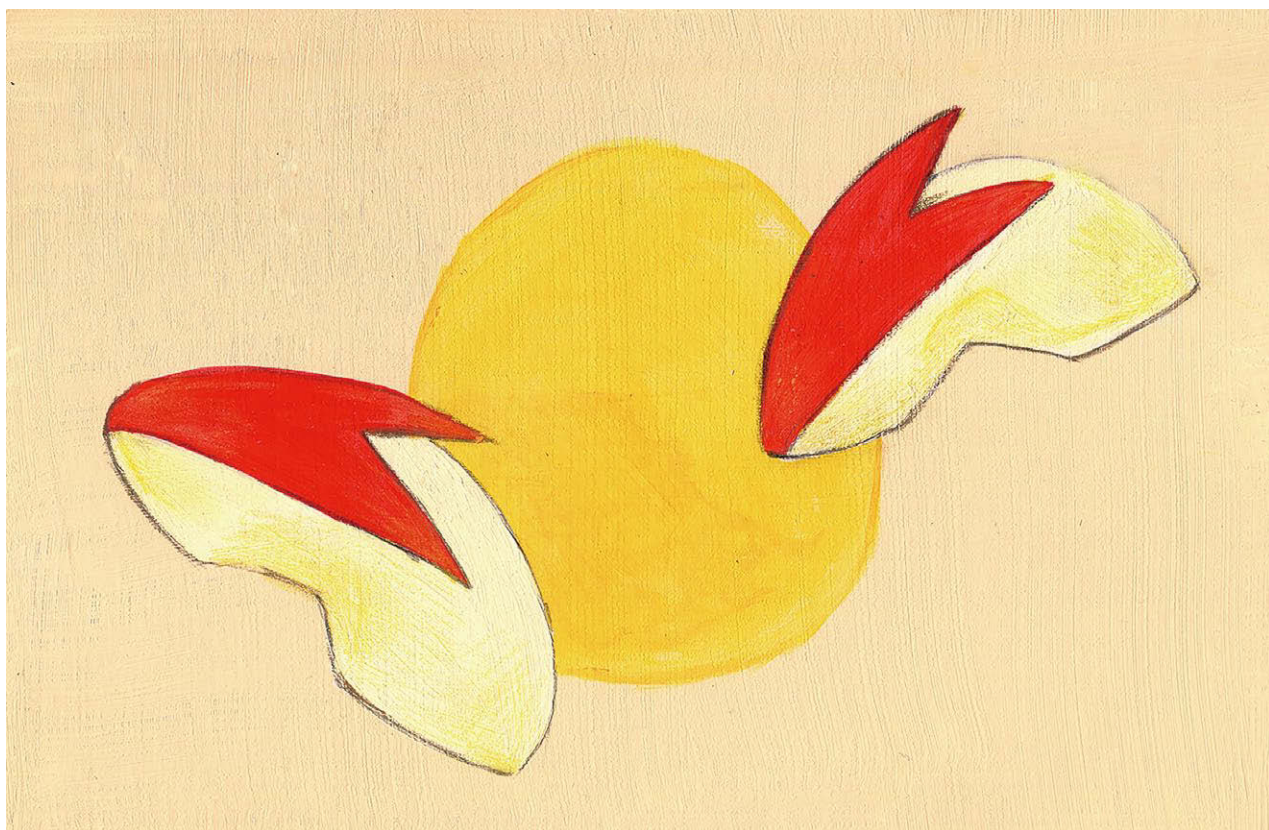


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2017年9月 NO.199



[もくじ]

- 2～3 「演劇と生きていくこと」…渡辺枝里
- 4～5 むらと住民、ヨソモノを紡ぐ「縁劇」～八畝とわたしを巡る 演劇むら歩き～…大槻知史
- 6～7 かつてここにあった、現代美術との「対話」…黒瀬陽平
- 8～9 世界的タヒチアンチーム高知に！…長谷川千二美
- 10 「アンテナ」JK との出会い…下尾仁
- 11 「パンの学校 in かるぽーと」開校から卒業まで
- 12～13 高知市文化振興事業団 6～7 月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

演劇と生きていくこと

渡辺 枝里

はじめまして。「屋根裏舞台」という高知の劇団に所属している、渡辺枝里と申します。「サカナノホネ」という演劇ユニットにも所属しています。

二十代までは、アルバイトを掛け持ちしながら、演劇の本番のない時期は休日がないほど働き、本番前になるとお休みをいただいて舞台に取り組むような演劇中心の生活を送っていましたが、現在は、主婦と仕事と演劇をどのように両立させるか、試行錯誤している毎日です。

演劇との出会いは中学時代。友達に誘われてなんとなく入ったのが演劇部。当時の私は人見知り

で、どっちかというとおとなしい、思っていることを人に伝えることが苦手なタイプでした。初めていただいた役は老人ホームの慰問公演のおじいさんの役。おじいさんらしくない！と言われ、お昼休みに顧問の先生に呼ばれ、セリフの言い回しや動作の指導を受けたのを覚えています。

最初の公演こそ、なぜか顧問の指導を受けましたが、この顧問は基本的にはあまり部活に顔を出さない先生で、うちの演劇部はおもに部員たちだけで練習を行っていました。演劇祭や演劇コンクール

の作品選びから出演者、スタッフ、練習の方法を決めるのも自分たち。最初は先輩の意見に従っているだけでしたが、そのうち副部長になり、先輩から「どう思う?」「どうしたい?」と聞かれることも増え、同級生や後輩の思いを聞く機会も増えました。聞かれることにうまく答えられず、考えがあっても言葉にできず、自信をなくしたり、同級生や後輩の意見のすれ違いに落ち込んだり…。

けれど、部員同士ぶつかったり、向き合ったり、泣いたり笑ったりしながら作った公演が無事に終わった時の達成感は、他に代えられないくらい喜びでした。

私はすっかり演劇にはまり、高校卒業後すぐに、高校時代から大好きだった劇団、屋根裏舞台の稽

古見学に行き、その日に入団。

屋根裏舞台は、一九九七年に高知大演劇研究会の卒業生が中心となって旗揚げされた劇団で、当時は年二回ほどのペースで、主宰の奥田恵のオリジナル作品を発表していました。カラフルな照明の中、大がかりな大道具の舞台の上で、詩的で音のきれいな抽象的なセリフを、役者が飛んだり走ったり汗だくになりながら発する屋根裏舞台の世界。公演後のアンケートでは「セリフが何を言っているのかわかりませんでした」「ストーリーがよくわかりませんでした」と書かれることも多かったのですが（私自身、観客だった時にはそ



う書いたことがあります）、汗だくの役者から溢れ出す生命力、ストーリーはわからなくても感じられる人間の感情、葛藤、息苦しさ、悲しみ、孤独、そして喜び……。もがくように、分かれ合えなくても、届け、届けと叫び続ける…。

私は今でも思っていることを人に伝えるのが得意ではありません。今この文章を書いていても、この言葉は本当に自分の気持ちだろうか？ 読んだ人に誤解を与えてしまうのではないだろうか？ と不安に思っています。学生時代は、それで自分にまったく自信がなくて、落ち込んで、友達が心配して声をかけてくれても自分が落ち込んでいて理由をうまく言葉にできなくてまた落ち込んで…。自分ですら自分のことを理解できないのに、他人にわかってもらえるわけがない…。と、心にシャッターを下ろしていた時もありました。

ですが、観客として屋根裏舞台に出会って、（ありきたりな言葉ですが）不安なのは私だけじゃないんだ、と感じたことで救われ、役者として屋根裏舞台の舞台に立った時、自分が解放されたよう

な気持ちになりました。

練習中、役と向き合っている時、演出と向き合っている時は、苦しくて苦しくて、自分のことすらわからないのに他人（役や演出）のことなんかわかるはずない！と落ち込むけれど、公演が終わるころには、役にいつの間にか近づいていて、自分の中に新しい経験が増えたような気持ちで、「次回もがんばろう」と思えるのです。

劇団員と朝方まで稽古をしたり、大道具を作ったり、台本について話し合ったり、本音でぶつかり合ううち、不得意ながらも、気持ちを言葉にすることもできるようになりました。

実は一度、本当に演劇を辞めよう、と決めたことがあります。役者の自分に自信がなく、劇団のみんなに迷惑をかけていると感じてしまったからです。私は、屋根裏舞台の「ひみず」という公演を最後に、身を引こうと思いました。私が演じる「少女」は、人生に思い悩み、決断できずにいました。私は、人生最後の公演だからと、「少女」に全力で向き合いました。公演の前日、主宰の奥田さ

んと話をしているとき、改めて「今回でやめるんですよー」というと、「せっかく渡辺の使い方をわかってきたのになー」と言ってくださって、結局その一言がうれしくて、辞めずに帰ってきてしまいました。「ひみず」ではお客様からも「少女」をほめていただけて、今思えば、それまでの私は、演劇に対する覚悟が足りなかったのかもしれない。一度辞める覚悟をした私は、演劇に向き合う覚悟をしました。

演劇というのは、一人ではなかなかできません。練習するのに相手役の役者がいたり、見てくれる演出がいたり、いっしょに世界を作ってくれる音響・照明・制作：何人かが集まって、ひとつの世界を作るため、イメージを共有



神様

作・梅子

しながら、本番までの数か月を過ごします。私は、このイメージを共有しながら、ひとりではなく、みんなで作る演劇が好きです。

今は結婚して、以前のように毎日毎晩練習に出かけることが難しくなりました。ですが、今の生活でも演劇は続けたい！と思い、「サカナノホネ」というユニットを二〇一五年に立ち上げました。メンバーは主婦三人。自由に動きづらくなった三人が、「それぞれがやりたいことをやる時に」をテーマに活動しています。

これからも、その時々々の生活環境に合うやりかたで、演劇を通して自分や、周りの人たちと向き合っていきたいなと思っています。そしてそれが、お客様の生きる刺激になれば、さらにうれしく思います。

わたなべ えり

一九八三年生まれ、高知市在住。「屋根裏舞台」「サカナノホネ」二つの劇団で、主婦業・仕事との両立を試行錯誤しながら活動中。

むらと住民、ヨソモノを紡ぐ「縁劇」 八畝とわたしを巡る 演劇むら歩き

大槻 知史

雄大な棚田を横目に食材探しに向かう観客たち。六十年近く前に嫁いできたというおかあさん宅でぜんまい出荷のお手伝いをしていると話は昔の焼酎づくりに。



「(密) 八畝酒造といってな、どこでもヤミ焼酎を造ったもんじや。税務署が来ると『みんな、きちんとみてもらえよ』」の大声で各家の酒甕を隠してな。」
おかあさん自慢の蒸しパンを頬

張りながら昔話を楽しんでいるとお手伝いはすぐ終了。

「また八畝に来てね! ハゲしよ」チャーミングなおかあさんとの別れを惜しんでいると、突然現れた謎の男がもらったばかりの干しぜんまいを奪い走り去っていった。

これは、二〇一七年五月二十日、二十一日に地キビ焼酎「八畝」の里、大豊町八畝で行なわれた『八畝とわたしを巡る 演劇むら歩き』の一コマです。大豊シヤクヤクの会と演劇団体のシアターTACOGURA・おさらい会、八畝の棚田再生に取り組む高知大学学生団体MBがタッグを組んで実施しました。

■当たり前に光を当て、

地域の誇りを取り戻す

八畝は徳島県との県境に位置する小集落。棚田風景が美しいこのむらは近い将来の集落消滅が懸念されています。リタイア後に移住された大谷夫妻が、華やかな花で村に誇りを取り戻すために高知大学農学部 の濱田和俊先生と耕作放棄地の棚田にシヤクヤクを植えたのが大豊シヤクヤクの会の始まりです。

二〇一三年より大谷夫妻や濱田先生とともに在来種トウモロコシ・地キビの復興栽培に関わった筆者は、八畝の古老にインタビュを行いました。見えてきたのは地キビや雑穀を用いた焼酎の自家醸造と祭礼飲酒の芳醇な文化でした。

蒸留の仕方や神祭での宴を語る古老の眼は少年のように生き生きと輝き、記憶を紡ぎ出すかのよう に農業や林業、炭焼き、川での漁 労など、かつての豊かなむらの暮らしを滔々と語られました。

地キビ焼酎の取り組みが進むにつれて地区の方の視線も変わり、「もう少しで取れるがね」「本当は今くらいが美味しいがよ」と声を掛けてくださるようになり、「おらんくの土地を使ってくれ」というご厚意も頂くようになりました。二〇一五年に大谷夫妻や濱田先生、MBの尽力で地キビ焼酎を復活醸造させた際には、全世帯に焼酎を配布しました。

地キビ焼酎が縁で二〇一六年秋に開催された野外演劇「お國と五平」では、八畝の絶景を生かした演劇の素晴らしさ、八畝の昔ながらの暮らしぶりにたくさんのお客が感動されていました。何よりうれしかったのは、地区の方々から「感動した」「来年も是非やって欲しい」との声を頂いたこと。演劇はもちろん、自分たちが当たり前と思っていた八畝の景色が美しい芸術の場になることへの感動だっ

たのかも知れません。

これらの経験で感じたのは、八畝の雄大な景観や焼酎づくりなどの生活文化は県民が大切にすべき貴重な「暮らしのアート」だということ。その価値をヨソモノが一緒になって見出し、「まちのアート」と触媒させることで観客も地区の方も八畝への魅力を再発見することができる。これこそが地区の継承に必要な誇りの再生や、八畝を愛するヨソモノとの縁づくりに繋がるのではないか。

そんな想いから本年度は住民と観客がより近く関わり化学反応を起こせる「演劇むら歩き」を企画。集落を舞台に見立てたストーリー仕立てのむら歩きに、地区の方にも語り部として参加して頂きました。

■クエストからはじまる、

八畝とわたしを巡る旅

「交流会の食材を忘れた主催者側の内輪揉め」という衝撃の展開（もちろんお芝居）を目撃した観客は「BBQの食材探し」を依頼されて、むらの各所を食材集めに奔走します。

ヤギ乳を頂きにいったお家では、ヤギを使った昔の子育てや山仕事でのお味噌・漬物の美味しさを伺いました。ぜんまい干しのおかあさんはとてもチャーミングで、再会を約束したり、亡くなった家族を思い出して涙される観客も。帰り道のこいのぼりは、新しい生命がみんなの希望となっている象徴です。

棚田に目をやると、最初は熱心にしろかき作業をしていた学生団体MBの男子ですが、女の子を巡って恋の鞘当がはじまったようです。最後にはなぜか泥んこ相撲で決着をつけることに。ドロップキックも飛び出す死闘を制した男の子が観客の助けを借りてシヤクヤクの花を手在意中の子に告白するも撃沈。悲しい笑顔を浮かべた彼は夕日に向かって坂を駆け上がるのでした。

お堂の前で村人役の役者が幼馴染からの手紙に書かれた小川未明のイチヨウの詩を朗読した後、役者とMBの学生が集まり棚田の風景に向かって「ふるさと」を合唱。その後、クエストクリアの合図とともに、その昔、実際に焼酎を隠していたお堂の影から高く積ま

れた地キビ焼酎「八畝」が現れ、歓声とともにジビエBBQと田舎料理の交流会になだれ込んだのでした。



今回のテーマは「八畝とわたしを巡る演劇むら歩き」。昔ながらの暮らしの文化と自然、地域を愛し家族との歴史を愛する住民にふれることで、観客が自分の心の中にある大切なふるさとを思い出す時間を目指しました。

「ふるさと」を聴きながら涙ぐまれている方、お土産に配った八畝の葉書で、大切な人や大切な過去・未来の自分へ便りを出されていた観客の姿を見ると、それぞれが自分のふるさとを思い出し、そんな機会をくれた八畝への愛着と縁を紡いでくれたと感じることが

できました。

もともと芸術に縁がなかった私を感じるのには、地域おこしにおける演劇のパワーです。今回のイベントでも過去・現在の八畝の暮らしをもとに物語を紡ぎ、その上に今を暮らす地区の方の生の声を載せることで、単なる演劇やむら歩きではたり着けない共感に観客を巻き込むことができたように感じます。新聞やテレビでも大きく報じられ、語り部の方をはじめ八畝のみなさんにも、八畝の魅力を再確認する機会になったようです。

九月三十日・十月一日には八畝 Autumn festa2017と銘打って、昨年に引き続き棚田での舞台演劇とジビエBBQと田舎料理の交流会を予定しています。「暮らしのアート」と「街のアート」の融合を楽しみたい方、八畝との縁を紡ぎたい方、ぜひご参加下さい。

おおつき さとし

一九七六年生まれ、高知市在住。
高知大学地域協働学部准教授。

かつてここにあった、 現代美術との「対話」

黒瀬 陽平

二〇一七年六月二十二日、現代美術家・高崎元尚が亡くなった。

享年九四歳。亡くなるたった五日前に、高知県立美術館での新作展を無事オープンさせたところであった。

少なくとも高知で現代美術を志す人間であれば、高崎の名を知らない者はいない（もし知らなければ、その人はまだ現代美術を志しているとは言えない）。私が高崎のことを知ったのは中学生の時、高知市内にある都築房子先生の「造形教室」に通いはじめてからだった。それ以前も、高崎の作品

や本人の姿を目にすることはあったが、正確に見たのはいつだったか、記憶は定かではない。

たとえば、当時、高知のテレビをつければ必ずどこかで流れていた「ジーンズファクトリー」のCM。気鋭の映像作家である大木裕之が手がけていたそのCMのなかに、高崎の公開制作の映像がモニターにジュされていた。そのCMが流れるたびに、弛緩した日常の間に得体の知れない異物がまぎれこんで来たような気持ちになった。もしかしたら、私のなかで高崎元尚という人の印象を決めていたの

はあのCMだったかもしれない。

都築先生は、高崎の「教え子」だった。そのことを知った当時の私は、作風の全く異なるふたりが師弟関係だったことに驚きつつも、現代美術のゲの字もないド田舎だと思っていた高知に、豊穡な前衛芸術の系譜があることを知り、とても興奮したことをよく覚えている。

周知のように、高崎は、日本で最初の現代美術集団と言われる関西の「具体美術協会」のメンバーであったし、濱口富治らと結成した前衛芸術集団「土佐派」の展覧

会には、針生一郎や土方定一、中原佑介といった戦後日本を代表する美術評論家たちが訪れ、議論を交わしている。

高知にはかつて、確かに現代美術があった。そして、高知の現代美術は、戦後日本美術史の大きな流れとともにあった。絵描きになりたくて、岡本太郎や横尾忠則、大竹伸朗らに憧れていた当時の私に、そのことを教えてくれたのが、高崎元尚という存在だったのだ。

「最後の新作展」になってしまった高崎の個展は、七〇年代に取り組んでいた《破壊》シリーズの続編というべき展開であった。最初の《破壊》作品は、一九七二年に京都のギャラリー16で発表した《LANDSCAPE》は、黒く塗ったダンボールを積み上げ、ギャラリー空間を満たした後にそれを引き裂いて破壊する、というものだった。その後も、床に敷いた石膏ボード、壁に立てかけた波形スレート板、積みあげたレンガなど、様々なバリエーションの《破壊》作品を制作している。

なぜ高崎が、七〇年代に入ってから、《破壊》シリーズに着手したのか。一般的に、戦後日本美術史において七〇年代は、前衛が死んだ後の時代であると言われている。敗戦後から急速に隆盛した日本の前衛美術は、六〇年代の「読売アンデパンダン展」でピークに達し、一九七〇年の大阪万国博覧会で燃え尽きてしまう。美術評論家の榎木野衣は、「躁の時代」であった六〇年代に対して、七〇年代は「鬱の時代」であった、とすら書いている。

高崎自身に起こったことでは、一九七二年には高崎の所属していた具体美術協会の代表・吉原治良が死去し、それとともに解散となった。このような時代背景を考えれば、《破壊》シリーズは、転換期を迎えた戦後日本社会と、音を立てて崩れていった前衛美術に重ね合わされているようにも見える。

だとすれば、今回、七〇年代の《破壊》シリーズを再び展開した理由も、近年の時代状況と重ね合わせるによって、ある程度は

推し量ることができらるだろう。具体的メッセージや象徴、比喩などをほとんど用いない高崎だが、少なくとも先の震災以後、急速に変動しつつある国内、国外情勢に対して、高崎が無関心であったはずはない。

高崎の真意を確かめるすべは、もう無い。それは残された私たちの仕事である。これまで脈々と続いてきた、高知における現代美術の系譜を引き継ぐためにも、高崎のこれまでの仕事を総括した上で、「最後の新作展」に向き合わなければならぬだろう。

そう考えたとき、展覧会を見ながらずっとモヤモヤと気にかかっていたことが、はっきりとわかってきたような気がした。それは、あまりに文字通りの「破壊」というイメージがひとり歩きしているのではないか、という疑問である。たとえば、高知県立美術館の学芸課長補佐である松本教仁は、本展に寄せたエッセイのなかで、過去の《破壊》作品設営時に過酷な肉体労働があったというエピソードを紹介しながら、高崎の《破壊》シリーズには「理屈をはるかに超越した肉体の説得力があるように思う」と書いている。

しかし、本当にそうだろうか。《破壊》シリーズは果たして、そのような精神論で読み解けるものだっただろうか。高崎自身の証言に耳を傾けてみれば、《破壊》シリーズは、かつての前衛美術家としての自らの歩みが灰燼に帰してしまっただけのような時代の岐路に立ちながら、「自分を壊すかわりに物を壊し、これを作品と称する心境に立ち至った」のだという。破壊された作品と自分自身をはつきりと重ねる高崎の言葉に、なんとも言えないやりきれなさ、やるせなさを感じはしないだろうか。それだけではない。六〇年代の作品を見ても、そこには前衛真つ盛りの時代とは思えない、迷いに満ちた線があり（《アクシオン》、《モダンジャズ》など）、《破壊》シリーズの後に制作した、八〇年代の《不能》シリーズにおいても、まさに「不能」と化したグニャグニャの構造物が出現しているのでは

ないか。《破壊》シリーズは、これらの作品群に挟まれて存在していることを、決して見落としてはならない。

高崎は、高知における最重要の前衛美術家であった。そのことに揺るぎはない。しかし、やみくもに敬意を表するだけでは、かえって残された作品たちを沈黙させてしまうことになる。私たちは、残された作品たちと深く対話を重ねながら、高崎ですら語らなかつたことを発見し、語らなければならぬ。その態度を、「批評」と呼ぶのである。

くろせ ようへい

一九八三年高知県生まれ。
美術家、美術批評家。ゲンロン
カオス・ラウンジ新芸術校主任
講師。

世界的タヒチアンチーム高知に！

長谷川 千二美

初めてタヒチアンダンスを目にしたのは、二〇〇四年のことでした。二年半後の二〇〇七年二月、一生に一度のつもりタヒチへの家族旅行、それがまさか、このような日を迎えようとは…。この十一月、世界のタヒチアンファームから絶大な人気を誇る名門プロチーム、TAMARIKI POERANIが高知を訪れます。

タヒチでのタヒチ文化との出会いは衝撃的でした。パレウと呼ばれる布を腰に巻き、ココナツのブラ、頭には花冠といったカラフルかつシンブルな衣装を纏い踊る姿からは、人の生きる美しさと、生命の美しさが伝わり、生きてるっ

てなんて素晴らしいことなんだろうと感じたその感動は今も鮮明です。横で数人の男性に演奏される打楽器は力強く速く、かと思えば、その同じ奏者が打楽器のバチを弦楽器に持ち替え、軽快な音を鳴らし歌いだす。また、中年女性が太鼓を叩いている。「昔はきつと素敵なダンサーだったのだろうな」と想像させるリズム感で。凝った作りの大掛かりな衣装の踊りも披露される。タヒチの正装ともいえる衣装で、大抵はモレ（木繊維の腰みの）とタウポオ（大きな頭飾り）からなる。材料は自然素材で、植物の葉や釣り糸で縫い付けられている。

一週間の旅で、いくつものショーや練習風景に出会い、三世代に渡る人達が、生活の一部としてタヒチの踊りや音楽と密接に関わっている様子を見ました。赤ちゃんから祖父母の世代が同じ場を楽しみ、小さな子供が大人の真似を楽しそうにしている。大人達からは強烈なパッションを感じ、土地や祖先、家族を大事にする姿が伝わってくる。その様子はダンスや音楽そのものの魅力とともに、私たちの心を大きく惹きつけました。

不思議な縁が重なり、同じ年の七月、私達はまたタヒチにいました。そして、その年の十月には、

求めているものは現地タヒチからしか学べない、そんな気持ちでまたタヒチの地に立っていたのでした。

「タヒチで受ける感動を伝えたい。」ゼロからのスタートでしたが、真似したり追いかけてたりする目標となる前例もなく、ただタヒチを追いつめる日々でした。一緒に踊る仲間に踊りを教えるのは小学生だった娘の役目、音楽を研究し、演奏し歌うのは父親である主人の役目、私は踊り手が不足なら踊り、演奏が足りないなら太鼓を叩き、タヒチ語や文化を研究し、発表の場や伝えることのできる場を探す役目。

初の自主イベントはブティックの片隅のスペースを借りての、タヒチ通いで手にした手工芸品や写真の展示と踊り手一人の小さなショー、名付けて「私の好きなタヒチ展」。

二〇〇九年、二〇一〇年のよさこい。地方車と全ての衣装を手作りし、音楽、踊りを自作しての出場。生演奏で踊るといふ現地通りのスタイルは日本では非常に珍しく、愛媛、高松、岡山、大阪、福岡、



熊本、宮崎等から声をかけてもらい、ショーをしてきました。国内ショーはスペクタクル活動と名付け、ただショーをするのではなく、現地の雰囲気伝える場も作ってきました。自然素材や生の植物に拘った衣装、大道具、小道具を作り、会場を植物で飾り、照明もオリジナルで、照明の色の変化は演奏の手を一瞬とめて足元に隠したりモコンで。照明機材を積み、アンプやスピーカーを積み、荷物に埋もれながら旅しました。予算も時間もない中で自分達の思いを少しでも伝えられる場を作るということは、タヒチで感じた思い、タヒチを通して作られてきた思いを表現することでした。ショーを見た後に、私達がタヒチ

で受けたような衝撃を感じてもらいたい。それが私達の原動力。

国外では、二〇一一年イタリアのソレント、二〇一六年台湾でショーをしました。ソレントでは町を歩けば通りの各所で、バンジョーを弾きながらほれほれする声で歌う人達に出会い、「本当にここで私達家族三人、ショーをして受け入れられるのか…」不安と長旅の疲れで娘は高熱にうなされる始末。ただ、いつもそうなのですが、トエレ（ドラム的一种）に触り、衣装を触りだすと、心の高鳴りが不安や不調を吹き飛ばしてしまうのです。ショーは結果的に大きな拍手を頂戴し、急きょ声をかけてもらい、予定の三倍ほど舞台に立ち、前日不安な気持ちを抱えて歩いた同じ街を、ショーの後には沢山の握手や声援に包まれ歩くことに。音楽や文化を愛する心に国境はないと身をもって感じた貴重な経験でした。

「すぐになんとかステージに時間を作るから、お願い、披露してくれないか？」そんな誘いに急いで構成を考え、衣装を決め、ステージ近くに無理やり早着替えの

スペースを作ってしまう、それが私達のスタイル。合言葉は「そこをあきらめたらタヒチでなくなってしまう」。

タヒチ渡航は、踊りを主に学ぶ娘は約四十回、家族三人ではのべ百回を超えました。娘が高校二年にあがる前からの数年は、父親は非常に閉ざされた世界であるミュージシャンの一員として、娘はTAMARIKI POERANIの一員としてHEYVAという大会に出場すべく、地元高校へ通い続けることを断念し、タヒチに専念する生活を送ってきました。そして、HEYVAという大会に三度の親子出場を果たし、二〇一七年には優勝を勝ち取りました。この大会への参加は外国人にとってはとても難しく、ましてやTAMARIKI POERANIでの出場は現地人さえ希望者の半数も参加を許されません。

私達の活動が少しでも、高知での異国文化との接触の機会となり、また高知からの発信を通して、高知という素晴らしい土地を知ってもらいたいという思いで活動を続け、各地から高知に学びに来てく

れる人も増えてきました。

十一月には「World Music Night」でTAMARIKI POERANIを迎えます。台湾遠征の帰路の乗換日程を使い、十年以上に渡る互いの願いである来高を実現します。一般的にタヒチアンが来日しても、観客は愛好者ばかりという風潮の中で、できる限り色々な方達にこの貴重な機会に触れてほしいという願いは、「World Music Night」で叶えられることになります。会場はかるぽーと小ホール、私達が最もタヒチらしさを表現できる会場として過去二回の自主公演で選んだ場所。

過去の来日では数千人規模の動員をし、世界中からの大規模なオファーの中で、本公演主旨に理解を示してくれたチームのためにも、願わくばチケットが不足し、二回公演しないといけなくなりますように。

はせがわ ちふみ

高知市出身。タヒチアンダンスを
生演奏で踊るTiare Tahitiens 代表。

「アンテナ」 詩人「JK」との出会い

下尾 仁

周波数を合わせば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がる。すると、面白いことがやってくる。

皆さんは詩を書いたり聞いたりしたことがありますか？ 僕の大切な友人、梶原純君、通称「JK」を紹介したい。

彼との出会いは、僕がじんせんじゅカフェを開いて間もない頃だった。ふらっと一人の男が来店してきた。彼こそJKだ!!

彼の第一印象は眉毛が太く、寡黙で小動物のように感じたのを覚えてる。

初めて会った彼だが何故か初めての会った気がせず、来店したばかりの彼に三十分ほど留守番を頼んだぐらいである。何故かわからないが彼に対して安心感があった。

それから彼はよく来店するようになった。ある日、彼が詩を書いていて詩の発表会を帯屋町のスナックでやるとの事。彼にも詩にも興味があった僕は、是非、見に行きたいと、彼の発表会に伺った。

そこにいたのは、僕の知っている彼ではなく、自信に満ち溢れる僕の想像していた詩の発表会ではなかった。

彼は肉体全部を使い、声に強弱をつけながら「きんじち、きんじち」と連発。

後できんじちとは何かと尋ねたところ漢字にすれば「近似値」、意味はとくに無いとの事だった。

大袈裟かもしれないが、彼のパフォーマンスは、瞬きを忘れるほどの熱いパワー、チャクラが開いたのではないかと思うほど五感に訴えかける衝撃があり、僕はすっかり彼の大ファンになってしまった。

でもあいかわらず店に客で来た時は小動物のようにおとなしい、そのギャップが彼の魅力だ。二カ月に一度店でやっているオープンマイク形式のイベントでも、彼は毎回熱いパフォーマンスを見せてくれる。僕の熱望で一緒にパフォーマンスをやらせてもらった事もある。内容は大体、ゴミ袋に包まれた彼を僕が不燃物の日に出し「何処、僕を捨てるんだ」と即興で詩を朗読、陰で見ていた僕が「ごめん純」と駆け寄り、遊ぼう遊ぼうと二人で変てこダンスを踊るという意味不明のパフォーマンスだった。

早いもので彼と出会って七年。今では一緒にバンドを組み、お呼びがあればライブハウス以外にもお祭りや保育園のイベントなどにも出演させてもらっている。

彼と同じ舞台でパフォーマンスできるようにするとは、本当に出会いに感謝である。

男

梶原 純

男なら肉を食え！
野菜を踏み潰し
男なら肉を食え！
ビタミンなどに目もくれず
男なら肉を食え！
女などに遊ばれず
男なら肉を食え！
ギラギラと獲物を睨みつけて
男なら肉を食え！
小銭など握らずに
男なら肉を食え！
骨までガリガリ食い尽くせ
男なら肉を食え！
脂で体を潤せ
男なら肉を食え！
肉の精血をまぶたに塗れ
男なら肉を食え！
肉の死に感謝して
男なら肉を食え！

しもお ひとし

一九六九年生まれ
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

「パンの学校inかるぽーと」 開校から卒業まで

「また一緒にやりましょう。今度は高知の子ども達を巻き込みたいですね」と、二〇一五年の「ONE HARTZ STEEL ORCHESTRA Presents STEEL CARNIVAL」というコンサートを終えたときに、主宰の山村誠一さんから声をかけてもらったことを思い出します。

現在の舞台芸術は、「体験」に重きを置く活動を盛んに行っています。それらは、「ワークショップ」や「アウトリーチ」といった方法で行われ、高知市文化振興事業団でも積極的に取り組んでいる事業形態のひとつに挙げられます。しかしその多くは、コンサートなどの企画に付随した「一度きりの体験講座」という形に止まりがちです。単発の講座を数多く行うことで、たくさんの方々に芸術を肌で感じてもらえる機会をつくることはもちろん大切なのですが、あるひとつのグループに継続して芸術を体験してもらうことで見えてくるものも、きっとあるはずだと考えていました。

スティールパンという楽器は、カリブ海の島国、トリニダード・トバゴ共和国で、ドラム缶から作られた音階のある打楽器です。「音階のある打楽器」という点が非常に重要で、誰でも叩くだけで音が出て、且つメロディーを奏でることができるので。しかも、マイナーな楽器です。木琴などは学校でも触れることはあっても、スティールパンは、ともすれば一生出合うことのない楽器です。

山村さんと再会し、スティールパンの学校をかるぽーとにつくろうと決めたのは、ある種の「必然性」を感じたからかもしれません。その「必然性」に後押しされて動き始めたものの、長期的・継続的な体験事業は初めてで、九名の子ども達を迎えて開校した後も、手探りの状態であったことは否めません。先生役を請け負ってくれた「上東パンの学校（上東を愛する会）」の皆さんと、これでいいだろうか、子ども達は楽しんでくれているだろうかと話しながら進めていくうちに、そういった大人の

緊張が子ども達に伝わってしまっただと感じることもありました。そんな迷いを感じているとき、子ども達の成長には導かれるような思いでした。初めて出合った楽器で、音楽を学校以外で習ったことの無い子も、みるみる上達していききました。月にたった二回しか（企画した人間が言うことではないとは重々感じておりますが）楽器に触れられないという状況にも関わらず、最後には三曲しっかりと合奏できるようになりました。

演奏している子ども達の姿はとても頼もしいものでした。体験する場をつくることはできても、楽しいという気持ちは一方的に与えることはできません。子ども達には、感謝の気持ちで一杯です。

そして七月二十九日（土）、四月から練習してきた成果を「高知のスティールパン祭「初々しい編」」と題した発表会で披露しました。パンフレットには「もししかして初々しくなかったら拍手喝采をお願いします」と記載しましたが、ご来場いただいた皆さまは、子ども達の演奏に対して、純粋に拍手をくださったのではないかと思います。

発表会を終えた子ども達のキラキラと高揚した目は、芸術のもつ力を改めて大人達に見せつけてくれました。発表会の最後に渡した卒業証書を見て、この素晴らしい舞台をつくりあげてくれたことを、時々思い出して、そして自信に思ってくれたらと感じています。



二〇一七年七月二十九日（土）開催
高知のスティールパン祭「初々しい編」（パンの学校inかるぽーと第一期生発表会）
入場者・約九十名（未就学児含）

6～7月の事業から



第四十八回高知市民頭脳スポーツ大会

平成二十九年六月十八日（日）、高知市立中央公民館にて、第四十八回高知市民頭脳スポーツ大会を開催しました。

頭脳スポーツとは、百人一首などのカルタ競技や、囲碁・将棋・オセロなどのボードゲーム競技、カードゲームやパズルなどに大別できるさまざまな種類があり、国籍男女、年齢の区別無く楽しめる「頭でするスポーツ」です。

今年も昨年同様、囲碁（級段位別）・将棋・連珠（五目ならべ）・チェス・オセロ（各々年齢別）の五種目十四部門で開催し、五歳から八十九歳まで、二百七十名の参加がありました。

将棋の部は、大会開催時、藤井四段が自身の連勝記録を更新中で、その活躍に刺激されてか年少（小学生）の部への参加者が昨年比四割増。部屋に入りきらないかも!?と、うれしい悲鳴となりました。対局も白熱。決勝戦後の表彰式では、お互いの健闘を讃え合う姿がほほえましい年少の部でした。青壮年の部、高年の部の対局は夕方まで続き、対局後の感想戦など、参加者相互の親睦も図れた楽しい一日となりました。

囲碁の部は、参加部門の制限が年齢ではなく級段位のため、日頃対戦機会の少ない小学生、高校生、年配者が盤を囲み、対局後はマナーやテクニクを教わるなど、年代を越えた交流が生まれました。

各部門の優勝者には賞状・メダル・副賞が、準優勝者には賞状と副賞が、囲碁・将棋・オセロの三位の方には敢闘賞として副賞が贈られました。

初心者から上級者、誰でも参加できます。来年は、あなたの参加をお待ちしています。（参加者数・二百七十名）

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間3,000円（4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで）

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

高知市立中央公民館事業

第六十七回高知市夏季大学

七月十八日（火）から二十九日（土）までの日・月曜日を除く十日間、かるぽーと大ホールで「第六十七回高知市夏季大学」を開催し、十名の講師の方々とともに充実した学びの時間を過ごしました。

トップバッターはNHK大河ドラマ『龍馬伝』の演出を務めた映画監督の大友啓史



さん。撮影当時の思い出や高知の魅力を熱く語り、初日の会場を大いに盛り上げてくれました。

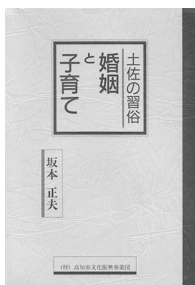
二日目以降も国際社会の現状や意外と知らない日本の政治・憲法、地球と人類が共存していくための指針や子育て論、人生を前向きに生きていくための考え方など、どれも大変興味深い講演が続きました。

また今年は、リオパラリンピック・ウィルチエアーラゲビー銅メダリストの池透暢さん、作家の門田隆将さんから県出身者も講師を務めてくださり、第一線で活躍するお二人の姿は、あらためて高知の誇りだと感じました。

◆第六十七回高知市夏季大学講師／大友啓史、萱野稔人、白井勝晃、阿川佐和子、国谷裕子、池透暢、北原照久、門田隆将、小宮山宏、谷口真由美（開催日順）

〈受講者数・延べ七千九百九十名〉

高知市文化振興事業団 出版物のご案内



土佐の習俗 婚姻と子育て

坂本正夫 著

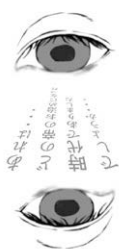
—今はなき、そして今も残る土佐の伝承・習俗—

長年に亘る調査研究から婚姻と子育てに関する問題を体系的にまとめ、近代における家庭の在り方や人間関係を明らかにする。（平成十年刊）

価格 1,512 円（本体価格 1,400 円＋消費税）

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち
高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071へ

‘作者、と 語り手、



風俗歳時記

長い間、「源氏物語」の「語り手」は紫式部だと思っていた。ところが、ある研究者によると違っているのである。「どの帝のお治めになった時代でありましたでしょうか……」と、語り始めるのは、作者ではない。作者、紫式部が創作した年配の女房である——というのである。つまり、「作者」と「語り手」を区別するというのだ。

目の覚めるような見解だった。思い当たる節がある。以下、私見である。源氏物語の主要な登場人物は、名前では呼ばれない。「藤壺」とか「六条御息所」とかいう高貴なあだ名や「頭中将」といった役職名で呼ばれる。ところが、ごくまれに名前で語られる人物が登場する。

場する。例えば、光源氏の家来である「惟光」である。惟光だけは、名前で語られるのである。（惟光は源氏の行くところには、いつも影のようによりそって仕える人物だ。）

なぜ、惟光だけが名前で語られるのか。次のように考えれば説明できるのではないか。

惟光は語り手である女房よりも身分が低いのではないだろうか。身分の低い者は名前で呼んでかまわないのである。逆に身分の高い人物を名前で呼ぶことは「不敬」にあたる。それが女房世界の価値観であり、常識である。そう考えると、源氏物語の語り手は、紫式部が創作した女房だということが納得できる。その女

房が肉声で語る物語なのである。源氏物語が書かれた当時、読者は「語り」の場を意識しながらこの物語を読んだのだろう。年老いた女房が、若い女房たちを集めて、「あれは……どの帝のお治めになった時代でありましたでしょうか……」と語り始めるその場に自分もいて、その肉声を聞いているかのような臨場感を味わっていたのではないだろうか。

そう考えると、文学作品を読み味わう上で、「作者」と「語り手」を区別することには、重要な意味があると思われる。現代小説を読むときにも、「作者」が創作した「語り手」と「作者」を、区別して読んでみたい。思いがけない発見がありそうである。

（本の虫）



高知を撮る

第33回写真コンテスト入賞作品

秋の大祭

（平成20年10月18日 須崎市大谷 須賀神社）

①おなばれ準備中 ②花とりおどり ③大縄切り

橋本 幸雄



ムーミン絵本の世界展 2017年 9月16日(土) → 11月5日(日)

トーベ・ヤンソンの原作から、描きおろし新作絵本ができるまで

横山隆一記念まんが館 9:00~18:00(最終入場は17:30まで) TEL.088(883)5029
入場料:前売り 一般700円/小学生~高校生500円(当日各100円増)/ 団体640円

風 伯	
最近、国民に対して平等に一定の収入を無条件で給付するベーシックインカム(BIC)が、すでにフィンランドで試験的に導入されているなど、ヨーロッパを中心に話題になっている。NHKでも今年二月に「新しい社会保障の形」としてBICが取り上げられ、この七月には民進党の松尾勉氏が日本でも成人に八万円のBICを」と提案している。	ベーシックインカム 私などは「無条件にもらえる」なんて素直に「いいんじゃないの」などと思ってしまうが、かわりに年金がなくなることを考えると、ちょっと微妙でもある。自分だけのことを考えるだけで、BICの難しさが想像できる。 若者が働かなくなるのではないかと、これまでの年金以下になるのとはどうかとが、懸念材料はあるものの、導

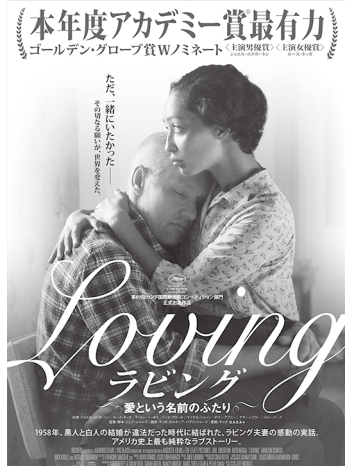
入の効果もまた大きい。年金制度は破綻しかかっているし、今の日本で働く若者の就労環境は決して好ましい状況とはいえない。なによりもすぐ目の前に来ているAや労働ロボットの出現などにより、働く環境は激変してくる。なにより、現代社会が抱える格差や貧困、それによる犯罪、高齢化や生活保護などさまざまな問題、不公平感が解消される可能性を秘めている。

財源の確保がもっとも難しいようだが、これも失業保険や年金の廃止、税金の一元化などによって十分可能なようだ。なによりも制度の簡素化によって、四百万人といわれる公務員を抱える行政の改革が確実に進む。逆にいえば、既得権益を守ろうとする行政が、もっとも強い反対勢力になるかも知れない。とはいえBICは、この沈みかけた現代社会の行き詰まりを解消できる、強力なカンフル剤になるかも知れない。

(森)

高知市立中央公民館事業
第183回市民映画会

本年度アカデミー賞最有力
ゴールデングローブ賞ノミネート



ただ、情にたづな

1958年、黒人と白人の結婚が違法だった時代に結ばれた、ラビング夫妻の感動の真実。アメリカ史上最も純粋なラブストーリー。

(C) 2016 Big Beach, LLC. All Rights Reserved.

レンガ職人のリチャード・ラビングは、恋人のミルドレッドから妊娠したと告げられ、大喜びで結婚を申し込む。

時は1958年、ここバージニア州では、異人種間の結婚は法律で禁止されていた。だが、子供の頃に出会って育んだ友情が、愛情へと変わっていったリチャードとミルドレッドにとって、別れるなどありえないことだった。

二人は法律で許されるワシントンDCで結婚し、地元に移住を構えて暮らし始めるが、夜中に突然現れた保安官に逮捕されてしまう。二人は、離婚か生まれ故郷を捨てるか、二つに一つを選択を迫られる――。

■日時
2017年9月21日(木)・22日(金) 11:00~

■上映作品(2作同時上映)
「ラビング 愛という名前のふたり」
「たかが世界の終わり」

■会場
高知市文化プラザかるぽーと 大ホール

■料金
一般 前売り 1,300円(当日 1,500円)
割引 1,000円 (学生証・長寿手帳・障害者手帳などをお持ちの方)

■お問い合わせ
高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「うさぎりんご」 久保 有加

食欲の秋がやってきました。
月で楽しく跳ねるウサギたちうさぎりんごでデザインし、秋を表現しました。

(くぼ ゆうか/
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)



井上道義 指揮

大阪フィルハーモニー 交響楽団コンサート

Photo/ 森山隆

2017.11.8(水)

高知市文化プラザかるぽーと
【大ホール】 18:00 開場 18:30 開演

全席指定 6,000円 【未就学児入場不可】

主催 / 公益財団法人高知市文化振興事業団・KUTV テレビ高知

助成 / 一般財団法人自治総合センター 本公演は宝くじの助成を受けて実施します。

Program

ブラームス
ハイドンの主題による変奏曲 作品56a
交響曲 第2番 ニ長調 作品73

ハイドン
トランペット協奏曲 変ホ長調